地方独立行政法人 東京都健康長寿医療センター

養育院・渋沢記念コーナー

板橋区栄町の敷地内小公園

①渋沢栄一銅像

日本を代表する経済人であるが、公益を重んじ、半世紀以上『養育院』の維持・発展に尽力した。大正14年（1924）、都民の寄付により建設。小倉右一郎の制作。

高さ16尺（4.3ｍ）、方20尺（5.4ｍ）の花崗岩の台座に、高さ10尺（3.75ｍ）、重さ480貫（1.8トン）の青銅製。

②徳川家斉墓前の石灯籠。（敷地内に家光墓前の石灯籠もあり）

11代将軍が亡くなった時、九州の殿様が上野寛永寺の墓前に寄進。

③養育院本院碑

平成25年、『養育院を語り継ぐ会』寄贈（他に谷中の大雄寺、了侃（ごん）寺、那須塩原の妙雲寺多磨霊園の無縁墓地に説明碑建設。

★ヒポクラテスの木（玄関標柱前）

ギリシャのコス島にある医聖・ヒポクラテスゆかりのプラタナスの子孫の木です。

東京都健康長寿医療センター

養育院・渋沢記念コーナー

- 2013年6月、東京都健康長寿医療センターは、新施設で高齢者医療に新たな一歩を踏み出しました。センターの前身は、**東京都老人医療センター ＋ 東京都老人総合研究所**であり、その前は、昭和47年に建設された**東京都養育院附属病院 ＋ 東京都老人総合研究所**です。更にずっと遡ってゆくと、今から140年前の明治5年に本郷に創設された**養育院**にまで遡ります。

- 時代の要請に応じて医療･福祉の多方面に展開していったその歴史は､日本の近代医療･福祉の歩みそのものです。新施設出発に当たって、入り口二階に**養育院･渋沢記念コーナー**を設け､くつろぎの空間､来院者の健康に関わる情報提供のための図書室とともに､養育院の歴史と健康長寿医療センターの展望を示す展示が用意されています。

- 伝統を伝えるものとして
  ①渋沢栄一銅像、養育院本院碑、徳川将軍墓前の石燈籠（小公園）
  ②養育院幾星霜之図：山口晃　作
  ③『養育院・渋沢記念コーナー』展示、櫻園通信（ご自由にお持ち帰り下さい）

- 「高齢者の健康と生活に役立つ情報」の提供に
  患者さまとご家族の方に役立つ図書コーナーを用意しています。

- 専門家向けの老年学情報センターと連携した運営となります

養育院幾星霜之図　山口晃 作　2013年

１階の玄関ホールにあります。

養育院・渋沢記念コーナー

養育院・渋沢記念コーナーは、食堂や売店にも隣接した明るいホールで、次の３つの役割を持つスペースです。

- 養育院の歴史に関する展示コーナー
- 患者・患者家族の健康問題への対処および高齢者の生活に役立つ情報コーナー「なるほど！からだラウンジ」。
- 呼び出し番号パネルを設置した休憩・待合スペース。

養育院・渋沢記念コーナー　利用時間

患者様（入院）とご家族　全日７時～21時／外来の患者様など　平日のみ　８時～18時

養育院・渋沢記念コーナー維持ボランティア募集

歴史展示についてのかんたんな解説　および　健康情報コーナー図書の貸出です。

月１～数回、平日の午前10時～午後２時ぐらいの間で、在席可能な時間帯（１日２時間程度）に、お願いいたします。

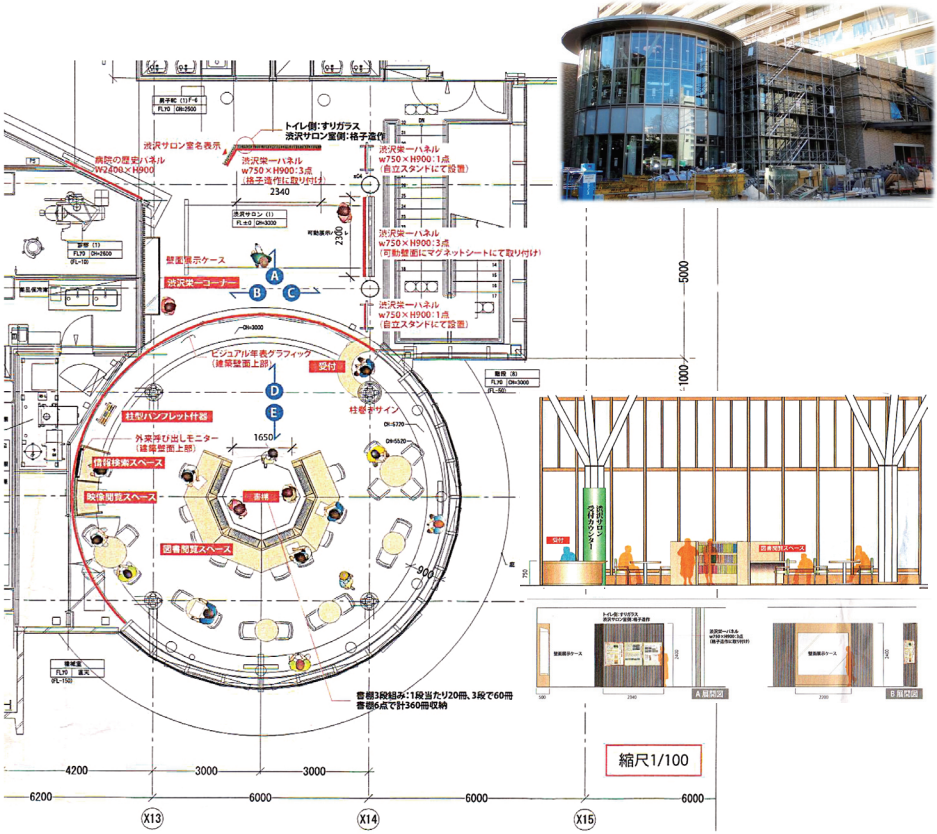
※交通費なし

【ボランティア登録の特典】

老年学情報センターの利用
（養育院の歴史関連資料の閲覧）
ボランティア控室のロッカー利用
インフルエンザワクチン接種（実費）

老年学情報センターの養育院・渋沢栄一関連資料
（一般非公開）

設計段階のコーナープラン　2013年3月



設計・施工
オカムラ製作所
2013年

養育院・渋沢記念コーナー

なるほどからだ ラウンジ ・医療と看護の歴史 コーナー

地方独立行政法人
東京都健康長寿医療センター
平成21年～

東京都
老人医療センター・(財)老人総合研究所
昭和61年～平成21年

東京都
養育院附属病院・老人総合研究所
昭和47年～昭和61年

(旧)東京都養育院附属病院
～昭和47年

養育院
明治5年～平成11年

社会の求め、時代の求めにこたえ
過去から現在、そして未来への志！

人の万物に勝れたるは
　　相親しみ相助くるの
　　心あるゆえなれば
常に我が身に費やす衣食住の
　世の恵みにむくわんと心がけ
何業なりとも
　　世のためとなるべきこと
勤めて怠るまじき事

養育院掟書　初款

養育院開所時、大久保一翁府知事が書き加える。

本
飲食・携帯電話
OKです
図書返却箱

“養育院”とは？

本郷（浅草）（1872～）
↓
上野（1873～）
↓
神田（1879～）
↓
本所（1885～）
↓
大塚（1896～）
↓
板橋（1923～）

1872（明治5）年に設立された救貧→医療・福祉施設

東京（府・市・都）が運営主体

時代の求めに応じて、医療・福祉事業を展開

狂人病室設置（明治8）　⇒　癲狂院　⇒　巣鴨病院　⇒　松沢病院
捨児・迷子の養育（明治18）里親・職親制度
盲唖児教育、幼童室　⇒　巣鴨分院　⇒　石神井学園
回春室：ハンセン氏病（明治32）　⇒　多磨全生園、長島愛生園など
結核病室（明治2）　⇒　勝山保養所、安房分院、板橋分院
感化部（明治38）　⇒　井の頭学校　⇒　萩山実務学校、八街学園
安房臨海保養所・分院（明治33）：虚弱児　⇒　船形学園
長浦更正農場（昭和17）：障害児　⇒　千葉福祉園
看護養成所（明治29）　⇒　板橋看護専門学校

精神病、ハンセン氏病、児童福祉、高齢者福祉などの専門施設が養育院より発展していった。養育院は、日本の医療・福祉の原点と言っても過言ではない。

渋沢栄一は、日本近代経済の父といわれるが、若い頃から社会活動にも熱心で、半世紀以上にわたる養育院の維持・発展に対する尽力は、氏の代表的な社会活動とみなされる。

養育院の名前は、東京都の条例廃止（2000年）により消滅したが、関連施設にその精神は引き継がれている。東京都健康長寿医療センターは、その中心的施設である。

江戸の福祉と医療

小石川養生所

1722（享保7）年、将軍吉宗のとき、小石川養生所が設けられ、無料で庶民の病気治療にあたる。幕末までの約140年間、貧民救済施設として機能した。

文京区小石川植物園にある養生所跡の井戸

七分積金・町会所

松平定信は、寛政の改革（1787 - 93年）で、江戸の地主負担の町入用を積立させ、困窮者の救済に役立てた。

松平定信の自画像

安政の改革と蕃書調所

黒船来航時、老中阿部正弘は、海防掛を再編成し、蛮書調所を作り、西洋の知識・技術導入をはかった。

病幼院創立意見

大久保忠寛（蛮書調所総裁）は、1857（安政4）年、『病幼院創立意見』で、西洋版小石川養生所の建設を提案。

蛮書調所・開成所での大久保一翁

海軍伝習所・長崎養生所

1857（安政4）年、来日したオランダ海軍医ポンペは、幕府による医学伝習所、長崎養生所を設立し、松本良順らに、西洋医学教育を行う。

ポンペが医学教育を行った長崎養生所

種痘所・西洋医学所

1858（安政5）年に伊東玄朴らは、「お玉が池種痘所」を設立。のちに「官立種痘所」と改称された。

咸臨丸・文久遣欧使節団・パリ万博使節団など

幕府は咸臨丸、遣欧使節団、パリ万博使節団などを欧米に派遣し、視察（工場、病院、軍事）に努める。

第3回パリ万博会場。現在この場所にはエッフェル塔が立っている。

これらの情報は、明治維新後に生かされていく。

養育院と東京府病院

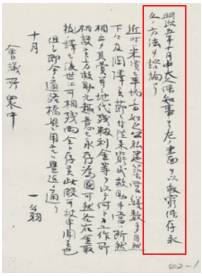
●町会所・七分積金は、営繕会議所・共有金と名を変え、都市基盤整備に流用。

●1872（明治5）年、東京府大久保一翁知事は、営繕会議所に『窮民並びに乞食徒を救済する方法』を諮問。

●営繕会議所は『救貧三策』を答申。

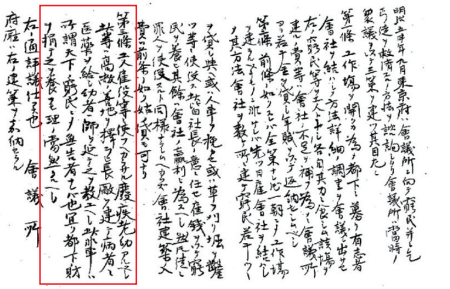
一．工作場・・・、二．日雇い会社・・・

三．工人、雇役等ニ使フ可カラザル廃疾老幼アルベシ。此レ等ハ高敞ノ善地ヲ選擇シテ長屋ヲ建テ病者ニ醫薬ヲ給シ、幼者ハ師ヲ延テ此ヲ教エシムベシ。此輩ハ所謂天下ノ窮民ニシテ告ル無キ者ナレバ都下ノ財ヲ損テ養フモ、理ノ当然タルベシ。



大久保一翁東京府知事の救貧策諮問

営繕会議所の救貧三策答申



養育院の創立

●1872（明治5）年、ロシア大公来日に際し、応急的に浮浪者を本郷の加賀藩空き長屋に収容。

これをもって、養育院の濫觴とされる。

●上野護国院を買い上げ、1873（明治6）年恒久施設を開院。医療開始。

東京府病院の創立

●1873（明治6）年、東京府病院開設予定公布。1874（明治7）、芝愛宕下に開院。

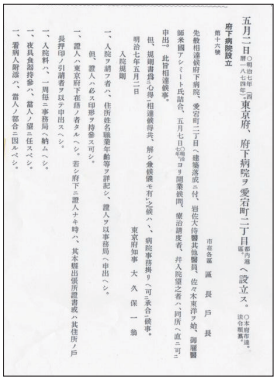
●米・英・蘭の高給お雇い医師、佐々木東洋、坪井信良（幕府の奥医）、長谷川泰（ポンペやボードワンの弟子）らが活躍。

●養育院医療施設は東京府病院管轄下に。

●救貧施療に限定→1881（明治14）年廃院。有志共立東京病院へ払い下げ。

→慈恵医大の源流

●後に、渋沢栄一は慈恵会を設立。財政を支援。

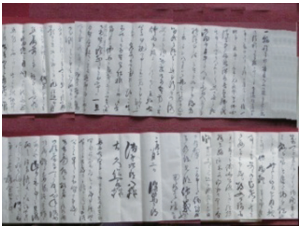


東京府病院（府下・愛宕下病院）唯一の写真

大久保忠寛（一翁）と渋沢栄一

大久保忠寛（一翁）

大久保一翁肖像
川村清雄油彩
（大久保忠昭氏所蔵）



渋沢がパリから帰ったのち、大久保にあてた会計処理の手紙　（大久保忠昭氏所蔵）

目付・海防掛・蕃書調所総裁に就任後、1857（安政4）年『病幼院創立意見』（西洋版小石川養生所）を提出するも、実現せず。

鳥羽伏見の戦い後、会計総裁・若年寄に就任。江戸城無血開城時の実質的責任者（勝海舟の上司）であった。

七分積金は、幕府の会計総裁一翁により救民の為の基金として明治新政府に引き継がれた。

江戸開城後、駿府藩中老に就任。20歳年下の渋沢栄一よりパリ派遣団の帰国報告受ける。

1869（明治2）年、静岡藩権大参事のとき、藩の太政官札の運用を渋沢栄一に託す。

1872（明治5）年、東京府知事に就任。養育院・東京府病院を設立。

渋沢栄一

1840（天保11）年、埼玉県深谷の豪農の生まれ。

若い頃尊皇攘夷運動。縁あって一橋家に仕官し、一橋慶喜が徳川将軍になり、幕臣となる。

フランスでの渋沢栄一

パリ万博派遣団に庶務・会計係として加わり、当時のヨーロッパ資本主義、銀行制度、株式制度を実地に学ぶ。帰国後、静岡で商法会所成功。

明治政府で経済運営の要を占めたが、大久保利通の予算要求に抵抗し、1873（明治6）年退官。

東京府知事大久保一翁より七分積金の運用を託される。

日本銀行前の渋沢銅像

現在の「みずほ銀行」、「東京ガス」、「第一三共」などの設立に貢献し、日本資本主義の父とも言われている。

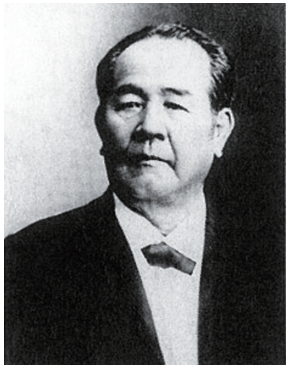
養育院、冬の時代

●上野の公園化と、養育院の移転

ボードワン（オランダ軍医。医学講師として、ポンペのあと長崎養生所で講義）の提言により、上野の山は公園・博物館用地に。

これにより、養育院は神田和泉町に移転。東京大学は本郷へ。東京府病院は廃止。

養育院維持に頑張る！



●田口卯吉による民会発言・税支出停止

田口卯吉が「税金を使って、貧乏で働けない人を養育することは怠け者を作ることになり、税金で養うべきではない」と市会で演説。

渋沢栄一は、政治は論語でいう仁に基づいて行なうのは当然と主張したが、税の支出が止められ、養育院は委任経営となった。

●養育院の委任経営化と、本所長岡町への縮小移転

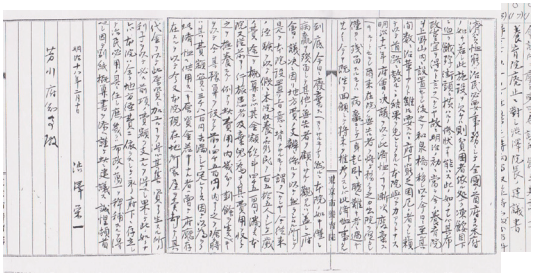
鹿鳴館貴婦人慈善会図

養育院は、土地の売却、利子、鹿鳴館の慈善バザー、寄付、皇室の援助などで運営するも、資金不足で縮小。

●渋沢院長の公営化を求める建議書

養育院は、1890（明治23）年、東京市営となり、渋沢栄一は養育院長に就任。

渋沢栄一は、ヨーロッパには大きな慈善施設があると主張し、大塚に新施設の建設を求めた。



養育院の発展に貢献した人々

安達憲忠（1857 - 1930）

民権運動などをしていたが、1887（明治21）年、東京府に就職。渋沢栄一に見込まれて1902（明治24）年に養育院幹事となる。

渋沢を補佐して社会事業に邁進。実質的な企画運営を担い、回春病室、井之頭学校、安房分院、巣鴨分院、板橋分院の創設などに尽力。

1919（大正8）年退職するまで、安達が企画し、渋沢が政治的な仕組み作りと資金集めを行い、安達が運営の実務をこなすと言う二人三脚であった。

入沢達吉（1865 - 1938）

東大でベルツに学び、1895（明治28）年東大助教授。ベルツの後任教授となり、内科学の確立に貢献。

助教授時代に養育院医長を兼任、安房分院、板橋分院などで、結核対策に尽力。

養育院体験を元に『老人病学』出版、老人病学の草分けとなる。

光田健輔（1876 - 1964）

東京帝大病理から、東京市養育院に派遣。癩患者に関心をもち、専用の回春病室を設営した。

ハンセン氏病の病理、看護婦教育、安房分院、結核対策などで活躍。

1909（明治42）年　全生病院院長
1923（大正12）年　フランス第３回国際癩会議出席
1930（昭和　5）年　国立療養所長島愛生園園長
1934（昭和　9）年　日本癩学会会長
1951（昭和26）年　文化勲章

養育院の看護

拝志よしねと安達憲忠

東京慈恵医院看護婦教育所の拝志よしねと那須セイは、高木兼寛の留学していたセント・トーマス病院のナイチンゲール看護婦学校で、日本人として初めてヨーロッパの看護学を修めた。この拝志よしねが、養育院幹事・安達憲忠の妻である。

30歳の時、安達は東京府に就職、結婚した。新婦よしねは20歳の学生で、新婚早々、看護学留学生としてロンドンへ。帰国後、東京慈恵医院で勤務したが、激務の日々で過労となり、1892（明治25）年結核に斃れる。安達との結婚生活は5年、このうち3年はロンドン、しかも極めて多忙な日々であった。

看護婦としては“拝志”（父の出身地愛媛の地名）を名乗る。彼女はこの“拝志”の言葉が好きで、それが安達憲忠にも乗り移っての養育院事業への執念であったようだ。

瓜生岩子

孤児の不活発な様子に心を痛めていた渋沢は、1891（明治24）年、安達憲忠の旧知の慈善家・瓜生岩子を、幼童世話掛長として会津から招いた。瓜生は維新の会津戦争下で、両軍の傷兵や窮民の看護、孤児の教育に実績をあげ、その後も恵まれない子供の養育に携わった人である。日本のナイチンゲールと言われ、浅草の浅草寺に銅像がある。

養育院の看護教育

1873（明治　6）年：養育院掟書に看護人規則
1876（明治09）年：東京府病院産婆教授所
1884（明治17）年：有志共立東京病院看護婦教育所
1890（明治23）年：日本赤十字社看護婦養成所
1895（明治28）年：養育院で看護講習を実施（光田健輔、管井竹吉）
1899（明治32）年：東京市養育院看護婦養成所の認可
1919（大正　8）年：産婆養成開始
1940（昭和15）年：看護婦長及び看護婦勤務規定を制定
1951（昭和26）年：東京都養育院附属看護学院（乙種→准看護）
1971（昭和46）年：東京都板橋高等看護学院発足
1977（昭和52）年：東京都板橋看護専門学校に改称

第二次世界大戦と戦後復興

塩原疎開

1944（昭和19）年、塩原温泉の旅館を買収し、栃木分院を開設、養育院入所者を疎開させた。

当初は板橋本院より、老人及び盲人など、後には安房臨海学園などの児童も加わり、1945（昭和20）年5月には養育院収容者1,211人のうち、694人が在籍した。

戦中、戦後の劣悪な食糧事情の中で、分院廃止の1952（昭和27）年まで、この地における物故者は582名にのぼり、那須塩原の妙雲寺に合葬されている。

板橋本院の空襲

1945（昭和20）年4月、米軍の東京大空襲で板橋施設の9割が焼失、看護婦等の奮闘にもかかわらず、利用者107名の犠牲を出した。

戦後、不発弾処理が行われた

戦後復興

戦後の混乱期、板橋本院、石神井学園、安房臨海学園などに多数の浮浪児を収容。戦災浮浪児対策は、この時期に特徴的に見られた養育院事業である。

1949（昭和24）年春に、昭和天皇御夫妻が、お見舞いに行幸された。

板橋本院の再建は、区の都市計画と整合性がとれずに難航したが、占領下の1949年（昭和24）、連合軍軍政部のキャロー女史の発言で、敷地の一部を中学校、公園、区の施設に提供し、渋沢銅像は引っ越しすることで再建にこぎ着けた。

黄色：昭和25年段階の養育院敷地
赤色：中学校、文化会館、公園、交番などに敷地提供。番号は渋沢銅像のお引越し！

日本が独立を回復し、高度成長の波に載ると共に、社会の求めも変質し、救貧対策から、障害者・高齢者福祉の充実へと移行し、施設が徐々に作られるようになった。

高齢者医療・福祉の展開　板橋キャンパス：1972～2009

●東京都養育院付属病院

⇒東京都老人医療センター

最新の医療設備（CT、MRI、PET）

高齢者リハビリテーションの展開

高齢者診療のガイドライン作成

先端医療・地域連携

→高齢者に最適の治療を追及

●東京都老人総合研究所

老化・老年病の自然科学的研究

（病理学、生理学、生化学・・・）

高齢者と社会の人間科学、社会科学的研究

（疫学、介護とケア、社会調査、心理・社会学研究）

市民公開講座（1972～継続中）

海外との研究交流

付属病院開院時
皇太子（平成天皇）ご夫妻行啓

●老人福祉施設

養護老人ホーム

板橋老人ホーム（～2007）

特別養護老人ホーム

板橋ナーシングホーム（1960～2000）

ハーフウエイハウス（1977～2000）

指定介護老人福祉施設（2000～　）

介護老人保健施設（2000～　）

ショートステイ（2001～　）

通所リハビリテーション施設（2001～　）

東京都健康長寿医療センター 新施設オープン

シンボルマークの意味：
健康長寿の実現を目指し世界へ羽ばたく鳥が、寿の文字をくわえ、高齢者を支え、守って行くというメッセージを込めています。鳥の飛ぶスピード感と力強い寿の文字の流れは、高度医療に取り組む先進性や未来志向をアピール。ポイントに充実感・エネルギーを呼び起こす色といわれるオレンジ色を配し、全体にグラデーションを用い立体感を持たせる事で先進性への意欲を表現した。

2009（平成21）年４月、これまでの東京都老人医療センターと東京都老人総合研究所が合併し、新たに地方独立行政法人東京都健康長寿医療センターとして発足。

基本理念：

センターは、高齢者の心身の特性に応じた適切な医療の提供、臨床と研究の連携、高齢者の QOL を維持・向上させるための研究を通じて、高齢者の健康増進、健康長寿の実現を目指し、大都市東京における超高齢社会の都市モデル創造の一翼を担う。

私たちの目指す方向

1） 高齢者の特性に配慮した医療の確立と提供
2） 高齢者医療・介護を支える研究の推進
3） 高齢者医療・介護を支える専門人材の育成

高齢者医療では、
研究所で得られた成果を取り入れながら、

- ３本柱の重点医療
  - 血管病医療（生活習慣病など）
  - 高齢者がん医療
  - 認知症医療
- 高齢者急性期医療・救急医療の充実とその提供
- 地域医療機関や福祉施設等との地域連携

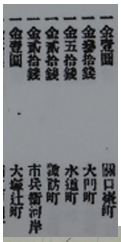
チーム医療を実践し、患者サービスの向上を図りながら、
より安心で信頼できる質の高い医療を目指します。

時代の求め、社会の求めに応える志

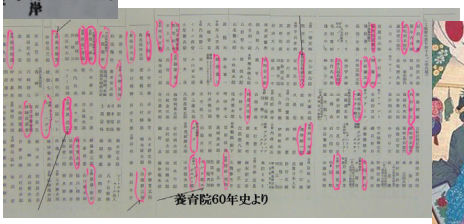
船形磨崖碑
多くの人たちの基金が養育院建設に充てられ、房総の船形にこのことを顕彰する10ｍを超える巨大な磨崖碑がある

白河楽翁：七分積金、町会所
大久保一翁：病院幼院創立意見、
養育院・東京府病院創立
渋沢栄一：半世紀養育院維持・発展に尽力
安達憲忠・拝志よしね：社会事業に執念
入沢達吉：養育院医長、老人病学
光田健輔：ハンセン氏病、看護教育
村上元孝・太田邦夫：
1972～の病院、研究所の活発な運営

養育院を支えた多くのひとたちの志

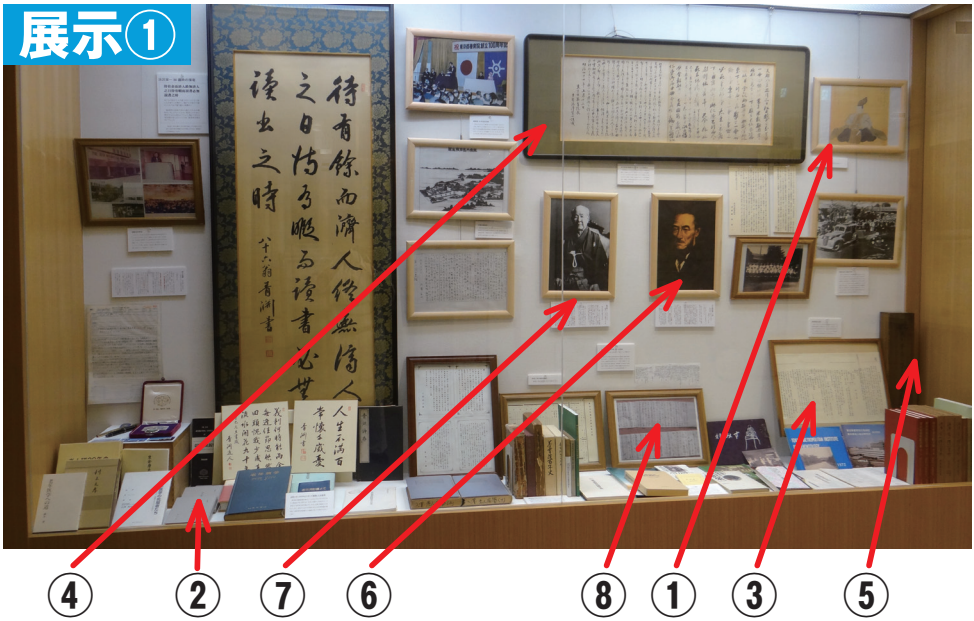


庶民の10－20銭の寄付から多額の寄付、ボランティア活動・・・



鹿鳴館舞踏会におけるバザーの益金も養育院の運営に

ご寄付・ボランティア募集中！



①**松平定信自画像**（老中就任時. 1787年、寛政の改革で七分積金･町会所つくる）

②**七分積金**（都市紀要）、**七分積金始末**（川崎房五郎）

③**病幼院創立意見**：1857年大久保忠寛右近将監（蛮書調所総裁）

④**松平定信の心願書と渋沢栄一の讃**（養育院長室に長く飾られる）

⑤**松平定信墓碑拓本**（江東区・霊巌寺）

⑥**大久保一翁油彩肖像画**（川村清雄・旗本出身の本邦最初期の洋画家）

⑦**渋沢栄一肖像写真**（昭和6年9月17日撮影、11月11日逝去、91歳）

⑧**渋沢栄一→大久保一翁宛て手紙**（徳川昭武のパリ留学時の残余金の始末を、静岡藩の実力者、大久保に相談。渋沢の公正な会計能力を示す）

＊展示内容などに、変更の可能性があります。

⑧ ⑨ ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦

①養育院大塚本院絵図、写真

②養育院公費設立を求める渋沢の意見書

③老人病学教科書：入澤達吉編（大川眞一郎氏寄贈）

④養育院、60.70.80.100.120. 年史

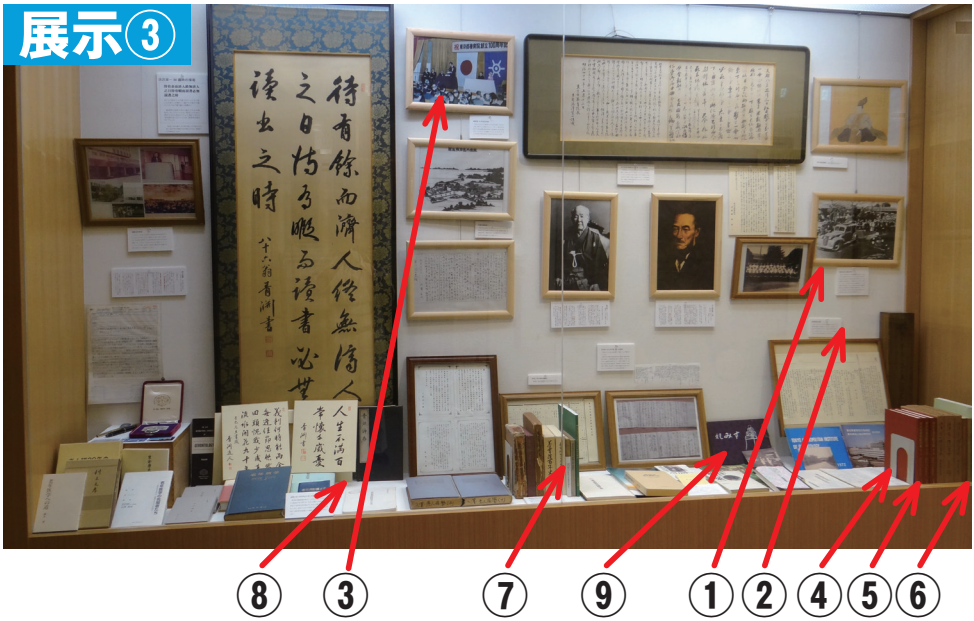
⑤安達憲忠伝：光田謙輔編

⑥明治９年の東京府統計、「養育院」、「東京府病院」の会計報告

⑦ 看護学校卒業式（中央に渋沢栄一、田中太郎）

⑧渋沢栄一揮毫軸（暇ができたら本を読むという人は・・・・・）

⑨渋沢栄一色紙集



①昭和天皇御夫妻行幸（1949年・昭和24年）

②GHQ 関係者など慰問写真

③養育院 100 周年記念式（1973年。皇太子ご夫妻（現天皇）行啓）

④渋沢栄一関連書籍（老年学情報センターにも多数あり）

⑤養育院月報復刻版（全30巻は老年学情報センターにあり）

⑥渋沢栄一伝記資料集（全68巻は老年学情報センターにあり）

⑦養育院、60.70.80.100.120年史

⑧磨崖碑写真（房総館山・船形学園）

⑨板橋看護学校同窓会誌、看護婦養成史

①養育院100周年記念式典（昭和47年皇太子御夫妻行啓）

②国際老年学会（1978年、品川プリンスホテル、開会式の村上会長、常陸宮殿下）

③国際老年学会記念の文鎮、ブローチ、プログラム

④村上元孝先生遺品（中央医学雑誌原稿、万年筆、　井藤英喜、稲松孝思寄贈）

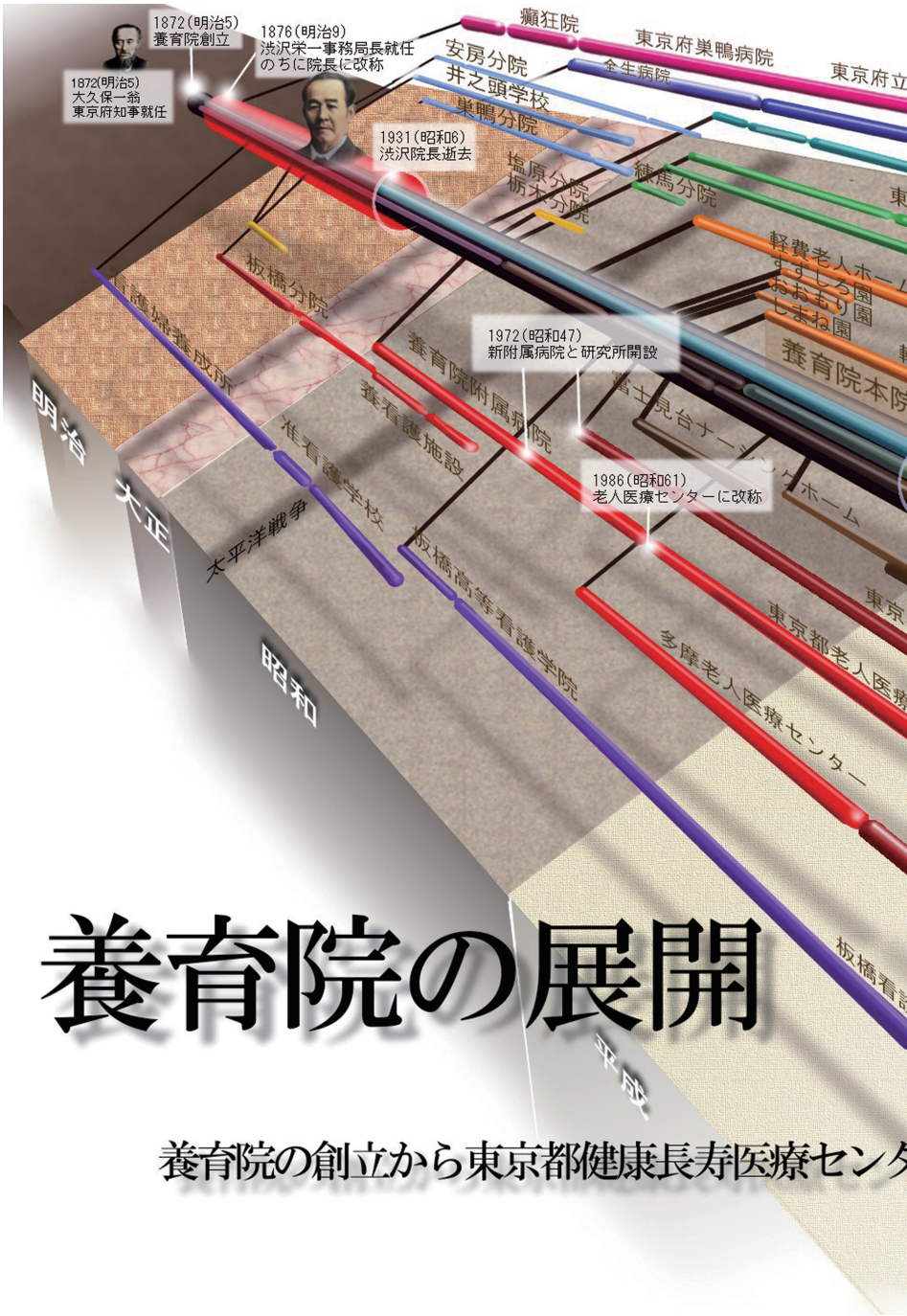
⑤老人医療センター、10、20、30年史

⑥老人総合研究所、20、30年史

⑦学会開催記念テレフォンカードなど（当院関係者主催）

⑧当センター職員が中心に編集した書籍など

⑨歴代病院長著書など（村上元孝、蔵本築、豊倉康夫、小沢利男）



養育院の展開

養育院の創立から東京都健康長寿医療センタ

松沢病院
東京都立松沢病院
多摩全生園
千葉福祉老人ホーム
千葉福祉園
村山分院
伊豆山老人ホーム
吉祥寺老人ホーム
大森老人ホーム
軽費老人ホームむさしの園
軽費老人ホームくぬぎ園
東村山老人ホーム
板橋老人ホーム
板橋ナーシングホーム
都老人総合研究所
東村山ナーシングホーム
2009（平成21）
東京都健康長寿医療センター開設
東京都健康長寿医療センター
多摩北部医療センター
専門学校
ターへ

新施設建築中（2013 年）

旧施設（1972 年建設）

：老人医療センター

：老人総合研究所

2013 年1月、稲松撮影

養育院→東京都健康長寿医療センターの沿革

養育院関連施設の出来事については必要限度内とし、養育院から東京都健康長寿医療センターにいたる医療面を主に記載しました。とくに、昭和47年（1972）以降は、板橋の養育院附属病院 → 老人医療センター → 健康長寿医療センターのことを中心に記載しています。

養育院の運用は、営繕会議所営 → 東京府営 → 委任経営 → 東京市営・都営ですが、本院の場所は、本郷 →（浅草）→ 神田 → 本所 → 大塚 → 板橋と移動しています。平成12年（2000）東京都の養育院条例は廃止され、以後の管理業務は東京都の高齢者施策推進室で行っていますが、2001年に板橋から新宿の都庁に移っています。

昭和47年（1972）板橋に養育院附属病院が新築され、昭和61年（1986）に東京都老人医療センターに名称変更しました。平成21年（2009）地方独立行政法人・東京都健康長寿医療センターに組織変更しました。

英語名は一貫して　TOKYO　METROPOLITAN　GERIATRIC　HOSPITAL　です。

渋沢栄一は明治7年営繕会議所の養育院、ガス局の事務取扱として養育院に関わり、明治9年養育院事務長となって以来、昭和6年に逝去されるまで、58年間養育院に関わり続けています。

西暦	和歴	月	運営	場所	主な事項
1722	享保　7				小石川養生所開設（幕末には機能せず、明治元年廃止）
1787	天明　7				老中・松平定信：町会所・七分積金制度開始、窮民救済
1857	安政　4				目付・蛮書調所総裁・大久保忠寛（一翁）：幼院・病院創立意見
1868	明治　1				大久保一翁（駿府徳川家中老）・渋沢栄一（パリ帰国報告）の出会
1869	明治　2				救育所（三田、高輪、四谷見附）で七分積金による救護
1872	明治　5	5			大久保一翁・第5代東京府知事となる
		5			町会所・七分積金⇒営繕会議所・共有金に（井上馨の内喩）、資金を橋梁、ガス灯建設などの都市基盤整備に使用。
		9			窮民救済策諮問⇒救貧三策を答申。養育院設置提案
		9	営繕会議所	本郷	ロシア大公訪日・加賀藩邸長屋に浮浪者240名収容（養育院の創設）⇒ 浅草溜へ引っ越し
1873	明治　6	1			東京府病院開設予定公布
		2		上野	上野・護国院（現・東京芸大）に養育院恒久施設開設 大久保一翁知事視察。養育院掟書 医師（村上正名）を嘱託し、入所者に医療業務開始
1874	7	5			渋沢が営繕会議所頭取を申し付けられる。
		5			愛宕下病院開院（→府下病院→東京府病院と改称）
1875	8	1			養育院は東京府病院の付属となり、医長・栗田胤顕派遣。養育院の重症患者は病院へ。養育院収容者の一部は病院の看護人に。
	8	2			東京医学校の長与専斎から臨床講義依頼

西暦	和歴	月	運営	場所	主な事項
1875	明治 8	5	会議所	上野	渋沢栄一が養育院本院事務長を申し付けられる。以後、昭和6年まで実質的院長。
1876	9	1			渋沢栄一が東京会議所会頭に推選される。
		6	東京府		養育院は東京府直轄経営となる
1877	10	6			府下生活困窮者の無料診療、施薬開始
1879	12	7			東京大学医学部派遣の医員引き揚げ
		10		神田	神田和泉町に本院移転（現・三井記念病院の隣）
					東京府癲狂院に患者移す⇒巣鴨病院、松沢病院に発展
1880	13				府会などで田口卯吉：貧民への税支出停止を求める
1885	18	12	委任経営	本所	本所長岡町（現・石原４丁目）に本院移転
					税支出停止。委任経営（慈善会、下賜金、寄付金で運営）
1888	21				種痘実施、22人善感
1889	22	11			出獄罹病者診療のため収容開始
			東京市養育院		東京市営時代となる。渋沢栄一養育院長、安達憲忠養育院へ。
1890	23				院内診療を東京大学医学部に委任。看護婦養成開始、６カ月。
1891	24				幼童世話掛長として、瓜生岩子を招聘
1896	29	3		大塚	大塚辻町に本院移転（現・大塚病院、監察医務院）
1897	28	12			看護婦、看護人の教育開始（光田健輔）
1899	30				入澤達吉医長在籍、～35年、結核対策。後に“老人病学”出版
1901	32				ハンセン氏病患者専用の「回春病室」設置（光田健輔）
1902	33				結核多し。房州勝山転地療法開始。明治42年に安房分院に移る。
	33				看護婦規則を改正、修業年限２カ年となる
	33				本院に感化部事業開始
1906	37	10			結核患者病室設置
	38				本院感化部を発展させ、井の頭学校開校
1908	39	9			全生病院開設（東村山）。養育院のハンセン氏病患者転院
	42				巣鴨分院新設
	42				安房分院落成
1914	大正 3	10			肺結核患者隔離治療のため板橋分院を開設
1923	12	9		板橋	板橋に本院を移転（関東大震災で大塚施設壊滅）
1925	14				渋沢栄一銅像竣工（板橋）
1930	昭和 5	10			本院医療施設、病院として開設許可
1931	6	11			渋沢栄一養育院長逝去
1933	8	2			老人患者の病後静養室を設置
1934	9	1			本院医療施設を病院として認可。患者収容定員717名。
1936	11	4			外来診療所を開所。地元住民の診療も行う
		5			本院医療施設、定員731名で認可
1937	12	7			内科、外科、眼科、精神科、耳鼻咽喉科、小児科を置く
1940	15	6			看護婦長及び看護婦勤務規定制定
1941	昭和16	10			医療保護法による医療保護施設として府知事より認可
1944	19		東京都養育院		塩原温泉へ一部戦時疎開（栃木分院、昭和27年まで）
	19	4			看護婦養成所修業年限を臨時措置により１カ年に短縮
		5			発疹チフス流行のため臨時都立伝染病院に指定。職員６名殉死
	19	12			看護婦養成所生徒の修業年限を３カ月短縮

西暦	和歴	月	運営	場所	主　な　事　項
1945	20	4	東京都養育院	板橋	米空軍 B29の大空襲。施設焼失し利用者107名戦災死
		9			元陸軍造兵廠工員宿舎を借り、病院として再発足
1947	22	7			医務課を廃止、付属病院開設
1948	23				養育院は児童施設を民生局に移管（石神井学園、安房臨海学園）
	23	3			付属病院レントゲン室、手術室、新築竣工
					養育院用地の板橋区の都市計画と養育院現地復興計画の衝突。
1949	24	3			養育院付属看護学院設置。昭和天皇夫妻行幸
	24	4			連合軍軍政部(GHQ)キャロー女史の養育院板橋復興の記者会見。 用地の一部を学校、区民施設、公園とすることで“養育院”復興。
					光田健輔医師、文化勲章受章（ハンセン氏病対策）
1952	27	7			付属病院解剖室竣工
1958	33	3			付属病院新築工事竣工（470床）
		9			准看護学院竣工
1969	44	1			美濃部亮吉都知事、1000床の老人専門病院建設表明
1971	46	4			板橋高等看護学院第１回入学式
1972	47	3			養育院付属准看護学院閉校
1972	47	4	東京都養育院		新付属病院・研究所開設（一般都民のための老人施設） 村上元孝養育院附属病院長・大田邦夫老人総合研究所長 この後、全国から新スタッフ集合。
		10			養育院100周年。皇太子殿下夫妻（現天皇陛下）行啓
					昭和56年まで順次病棟開床（最大750床）
		10			日本老年学会開催（会長、村上元孝院長）
					病院内に臨床医のための病院研究室オープン
1973	48	9			第1回老年学公開講座がはじまる。市民に対する働きかけ
1976	51	9			板橋ナーシングホーム開設
1978	53	1			CT（コンピューター断層撮影）開始
		8			第11回国際老年学会（会長、村上病院長）
					第２付属病院（現多摩北部医療センター）第１回建設委員会開催
					研究検査科、放射線科当直体制開始
1979	54	4			第２付属病院基本構想答申
		5			精神科病棟開棟（ナーシングホーム２階）
1981	56	4			老人総合研究所所長、今堀和友就任
1981		10			東京都老人総合研究所は財団法人に改組
1982	57	4			第２付属病院基本設計
		11			養育院附属病院10周年記念行事（記念誌、58.3刊行）
1983	58	1			病院内研究室を拡充
		3			外来・全面禁煙開始
1984	59	1			「老年学情報センター」開設
		3			村上元孝院長退任（同日付、名誉院長）
		4			豊倉康夫病院長就任
		9			米国国立研究所（NIA）と研究協力協定締結
1985	60	12			医事事務の電算化
		12			血液科病棟にクリーンルーム（2床）開設
1986	61	4			『養育院附属病院』の名称を「老人医療センター」と改称

西暦	和歴	月	運営	場所	主　な　事　項
		4	東京都養育院	板橋	老人総合研究所所長、積田亨　就任
					「多摩老人医療センター」（第２附属病院）開設
		5			連続剖検5000例達成（1960年12月より）
		6			老人総合研究所はWHO研究協力機関としての指定
		11			伊豆大島三原山噴火被災者受け入れ。救護団派遣
1987	62	4			厚生省臨床研修指定病院となる
		4			豊倉康夫院長「紫綬褒章」平成５年に「勲三等旭日中授章」
					この年、多くの診療科で予約制を導入（昭和61年より試行）
1988	63	3			MR（核磁気共鳴画像検査）開始
		3			中華人民共和国老年医療研究中心と研究交流事業協定
		9			ソヴィエト連邦医学アカデミー老年学研究所と研究協力覚書
					日本老年医学会認定医制度発足。当院から多数認定。
1989	平成　1	1	東京都養育院		村上元孝名誉院長逝去
		7			養育院事業推進検討委「養育院のあり方」を報告
					宇野宗佑首相板橋キャンパスを視察
1990	2	3			豊倉康夫院長退任、名誉院長となる。翌日蔵本築院長就任
		7			精神科病棟内に痴呆病床（10床）開床
					外来処方、診療予約のコンピュータ導入
		8			老化モデル動物施設の開設
		8			看護部制度に変更
		9			老人研にポジトロンCT施設（PET）完成。付属診療所開設
1991	3	4			第１期病棟改修工事開始、以後順次行い平成８年竣工
		9			第８回アジア太平洋神経学会（会長、豊倉名誉院長）
		12			週40時間勤務試行（土曜開庁方式）翌年７月本格実施
1992	4	4			老人総合研究所所長、木幡陽　就任
		6			救急救命士の病院研修を受け入れ
		7			新病院20周年記念講演会（都民ホールにて）記念誌発行
1993	5	4			小澤利男院長就任
		10			中国北京市に老年病医療研究交流団を派遣
		11			豊倉康夫名誉院長
		12			初めて「養育院QOL発表会」開催
					腹腔鏡下胆嚢手術、内視鏡下胃瘻手術盛んに
1994	6	5			第36回の日本老年医学会総会・蔵本築会長
		6			第１回養育院老年学会開催、平成17年まで毎年開催
		7			総合診療（CGA）病棟開設
1995	7	3			養育院老人医療センター運営基本方針策定。
					阪神・淡路震災救援団派遣
1996	8	3			老人医療センター改修工事竣工
		4			ICU・CCU拡大
1997	9	4			蔵本築名誉院長。折茂肇院長就任
		7			高齢者施策推進室の発足（以後、養育院に関する組織改正繰返す）
		9			脳卒中診療ユニットの開設
		12			エイズ診療拠点病院の指定を受ける
		12			板橋区、板橋区医師会との地域連携３事業開始

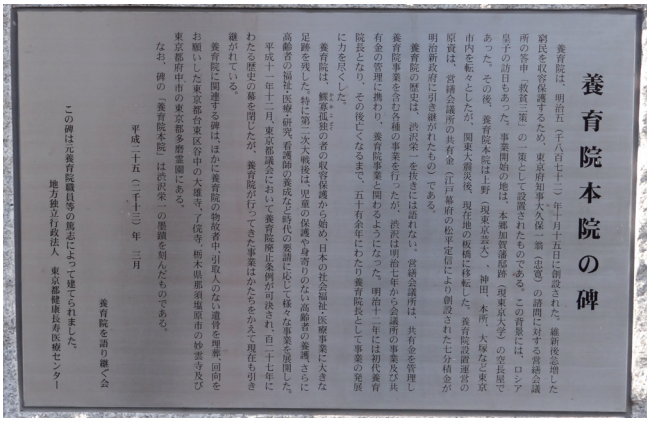
西暦	和歴	月	運営	場所	主　な　事　項
1998	10		東京都養育院		高齢者施策推進室管理部門は新宿の都庁舎に移る
		11		板橋	インフルエンザワクチン戦略展開。2001年に定期接種になる
1999	11				もの忘れ外来、ペインクリニックの開設
					ブレインバンクの開設
		7			区西北部医師会などと医療連携に関する協定締結
		10			国際高齢者年記念講演会開催
2000	12	1			区西北部二次保健医療圏等医療連携協議会の開催
		4			老人医療センター「ホームページ」を開設
		4			老人総合研究所所長、鈴木紘一　就任
					三宅島噴火救援団派遣、全島避難一部受け入れ
		10			地域連携室の開設
		11			養育院条例廃止：組織図上【養育院】の名前が消える
2001	13	1	東京都福祉保健局		高血圧外来、不整脈外来、めまい外来の開設
					心臓ペースメーカー1000例達成
					各科でクリニカルパス入院盛んになる
		4			高齢者施策推進室は福祉局に統合となる
		12			老人医療センター院内 LAN 稼働
2002	14	4			(財) 東京都研究福祉振興財団・老人総合研究所に改組
		9			老人医療センター30周年記念式典開催、記念誌発行
		10			林泰史院長就任。研究所所長兼任
2003	15	7			オーダーメイド医療実現化プロジェクト参画
2004	16	4			新・初期研修医制度開始（マッチング方式）
		5			病院機能評価受審。8月に認定
		8			「福祉局」と「健康局」が統合され「福祉保健局」となる
					冠動脈造影装置導入。冠動脈インターベンションン盛んに
					専任リスクマネージャー配置
2005	17				感染管理ナース専従となり、感染管理チーム活性化
					包括的呼吸リハビリ・クリニカルパス開始
2006	18	1			東京都老年学会と東京都保健医療学会が統合
		4			井藤英喜院長就任。研究所所長兼任
		7			東京都が「行財政改革実行プログラム」を公表。
					育寿会（糖尿病患者会）30周年記念行事
2007	19	5			福祉保健局「板橋キャンパス再編整備基本構想」公表
					NST（栄養サポートチーム）活動開始
2008	20	1			老研・遠藤玉夫：朝日賞「福山型筋ジストロフィー・・」
		11			レセプト　オンライン請求開始（10月診療分）
		11			連続剖検9000例達成（1960年12月より）
		11			昭和47年以来の医局の、翌3月に養育院付属病院同窓会
		11			第100回記念　老年学公開講座開催
2009	21	3			心臓外科開設
		4			老人医療センターと老人総合研究所を一体化し 地方独立行政法人・東京都健康長寿医療センターとなる。 松下正明理事長、井藤英喜センター長就任
		4			バイオリゾースセンター設立

西暦	和歴	月	運営	場所	主　な　事　項
			東京都地方独立行政法人	板橋	DPC（診断群分類別包括評価）実施病院に指定
		11			「さい帯血移植医療機関診療科」として登録される
2010	22				新センター建設基本設計（平成25年開院予定）
		2			「東アジアの高齢化・高齢社会」第１回ワークショップ開催
2011	23	2			新施設着工
2013	25	4			板橋区地域感染症対策合同カンファレンス開始 （医師会、日大、帝京大、豊島病院の連携）
		5			新施設内覧会。 医局同窓会（池袋メトロポリタン　ホテル）
		6			新施設開院。電子カルテ運用開始 養育院・渋沢記念コーナー開設

一部に不適切な表現とされる箇所が有りますが、歴史的事実を損なわないように原文を尊重してそのまま掲載している所が有ります。

【参考文献】

安達憲忠	東京市養育院沿革及実況	1896
渋沢栄一	回顧五十年	1922
東京市養育院	養育院六十年史	1933
東京市養育院	養育院七十年史	1943
東京市養育院	養育院八十年史	1953
東京市養育院	養育院百年史	1974
東京市養育院	養育院百二十年史	1995
東京都総務局	七分積金始末（東京都史紀要第８）	1951
江戸旧事采訪会	雑誌「江戸」2（3）（7）	1915
内藤二郎	社会福祉の先駆者 安達憲忠	1993
東京都	東京市史稿 救済編第４	1975



養育院本院の碑

養育院は、明治五（一八七二）年十月十五日に創設された、維新後急増した窮民を収容保護するため、東京府知事大久保一翁（忠寛）の諮問に対する学識会議所の答申（救貧三策）の一策として設置された。その背景には、ロシア皇子の訪日もあった。事業開始の地は、本郷加賀藩邸跡（現東京大学）の空長屋であった。その後、養育院本院は上野（現東京芸大）、神田、本所、大塚など東京市内を転々としたが、関東大震災後、現在地の板橋に移転した。養育院設置運営の原資は、学識会議所の共有金（江戸幕府の松平定信により創設された七分積金が明治新政府に引き継がれたもの）である。

養育院の歴史は、渋沢栄一を抜きには語れない。学識会議所は、共有金を管理し養育事業を含む各種の事業を行ったが、渋沢は明治七年から会議所の事業及び共有金の管理に携わり、養育院事業と関わるようになった。明治十一年には初代養育院長となり、その後じくなるまで、五十有余年にわたり養育院長として事業の発展に力を尽くした。

養育院は、鰥寡孤独の者の収容保護から始め、日本の社会福祉、医療事業に大きな足跡を残した。特に第二次大戦後は、児童の保護や身寄りのない高齢者の養護、さらに高齢者の福祉、医療、研究、看護師の養成など時代の要請に応じて様々な事業を展開した。平成十一年十二月、東京都議会において養育院廃止条例が可決され、百二十七年にわたる歴史の幕を閉じたが、養育院が行ってきた事業はかたちをかえて現在も引き継がれている。

養育院に関連する碑は、ほかに養育院の物故者中、引取人のない遺骨を理葬、回向をお願いした東京都台東区谷中の大雄寺、了侃寺、栃木県那須塩原市の妙雲寺及び東京都府中市の東京都多磨霊園にある。

なお、碑の「養育院本院」は渋沢栄一の墨跡を刻んだものである。

平成二十五（二千十三）年　三月

養育院を語り継ぐ会

この碑は元養育院職員等の義志によって建てられました。

地方独立行政法人　東京都健康長寿医療センター

アクセス

ご利用時間			
	一般外来者	：平日のみ	8：00 - 18：00
	入院患者・ご家族	：全日	7：00 - 21：00

本パンフレットは、明治5年（1872年）に創設された『養育院』から、今日の『東京都健康長寿医療センター』に至る140年余の福祉・医療史の道筋、敷地内にある養育院本院碑、渋沢栄一銅像などについて、わかりやすく説明したものです。

先人たちの、他人への思いやり、公益に対する志を考えるきっかけとしていただければ幸いです。

発　行　東京都健康長寿医療センター　平成26（2014）年2月
監　修　松下正明（理事長）　井藤英喜（センター長）
制　作　稲松孝思（顧問医）　宮本孝一（老年学情報センター）

（この内容は東京都健康長寿医療センターのホームページで公開しています。拡大版、改訂版を希望の方は、ホームページをご利用ください。）